

龍泉院参禅会会報『明珠』第十二号附録（平成二年十二月八日刊行）

教主釈尊

——その悲・智・慈の教え——

皆川廣義先生 口述

はじめに

ご紹介に与かりました常真寺住職の皆川でございます。椎名先生とは、駒沢大学の同窓でございます。長いこと学友としてお付き合いをいただいております。

私の寺は曹洞宗では一番下にある寺でございます。皆様の修行道場としてはふさわしくないのであります。しかし、寺の方にある理由がございまして、お引き受けさせていただきます。

それはお釈迦様がお亡くなりになるときに、「自分にとって一番有難い供養は、一人でも多くの人が教えを学び、実践して悟りと安心を得ていただくことで、お花を飾ったり香をたいてくれるよりもそれが一番嬉しい。」と語られていることによります。

寺の住職にとって、寺を道場として多くの人々がお釈迦様の教えを学び、行じて、悟りと安心をいただいくことが、お釈迦さまへのなによりの報恩の行になるわけで、そのためにお引き受けさせていただきますました次第でございます。ただいろいろと不行き届きの点のあることをお詫びいたします。

このたびは住職法話として、お釈迦様の生涯と教えについて、悲と智と慈というテーマでお話をさせていただきます。

はじめに、一般的に佛教の学問で言っている悲と智と慈という言葉に、私流の解釈を加えてお話しいたしますので、お許しいただきます。

一、悲

大分前のことですが、ある女子高校生が朝日新聞の「声」の欄に次のような投書をされていました。

それは投書者の高校で同級生の方が自殺され、校長先生や、担任の先生より自殺してはいけない、強く生きなければならぬと言うお話がありました。家庭に帰っても親達から、同じようなことを言われました。だけど何の為に自殺をしないで生きてゆかなくては

けないのだということを校長先生も、担任の先生も、親達も教えてくれないと言ったものでした。

私共は、何のために生まれて育ち、そして最後に死んでいくのか、人生の目的を教えてください、という意味の投書だったので。この投書は、図らずも澤山の方からの反響がありまして、何回かそれについてのご意見が新聞にのりまして、最後に、朝日新聞の「心のページ」でこれについての特集をしました。

皆さんの中には、これらの記事をお読みになった方があるかも知れませんが、最後に上智大学で「死の教育」をなされているデーケン先生のご意見がのっていました。デーケン先生は、カトリックの修道士ですから、何のために生まれてきたかということに関して、キリスト教的な説明をされていましたが、キリスト教の信仰をもたないその女子高校生には、納得いかなかったのではないかと思います。

何のために生まれ、何のために働いて、そして最後に何のために老いて苦しみ、病に倒れて苦しみ、死して土くねになっていくのかということについてはっきりした答えがなくて、彼女には不満足だったように思うのです。

私はそのことを自問自答いたしました。よく小中学校のPTAの集まりで議論した折など、この女子高校生が投げかけたような問いを皆さんにいたします。

私たちは何のために生まれてきて、何のために一生けん命働いて、そして何のために、最後に年老いて病に倒れ、死んでいくのか、少なくとも結婚して子供を産む立場になった時、このことが真剣に夫婦で語り合われて、納得をした上で子供を産まなかったら、無責任ではないかという意味の問題提起をするのですが、殆どの親達が人生の目的というものを明確に持っていないことがわかります。そう言う意味で、このことには深く考えさせられました。

大分前に、キリスト教の作家の曾野綾子さんが、「人間は、着陸する空港が判らないような飛行機には誰れも乗らないだろう。ところが、私達はそういう飛行機に今、乗ってしまっているのだ」とい

うお話をなされたことがあります。

私たちの人生の終着駅は、老と、病と、死でございます。ところが、このことをはっきり判らないで私たちは、人生という飛行機に乗っているように思うのです。私たちはほかの動物と違いまして、心をもった動物として、自分が最後に降りて行くべき、老と、病と、死の空港をしっかりと見極めねばならない、責任を自分自身に対して持っているように思うのです。そこが明確になれば、さきほどお話ししました高校生が投げかけた「私達は、何のために生まれてきたのだろう。人生の目的は何なのだろう」という問いに答えられます。



常真寺書院「花聴」での皆川先生

私達の教主として仰いでいるお釈迦様は、この問題を真剣に悩まれ、菩提樹の下での悟りによって、解決を得られています。

お釈迦様は、ご承知のように、今から二千五百年程前のインドのカピラバットウという小国の皇太子として生れた方です。生れて一週間後に母親（マリーヤ）を亡くしますが、叔母のマハーパジャパーティーによって実の母親と同じようにして育てられました。物質的にも、精

神的にも何不自由ない生活をなされて成長し、青年時代になって、お母さまの郷里の人であるヤショーダラーと結婚され、幸せな生活を送っていました。

ところがある時、坐禅中に人生に対する考え方の転換を迫られることとなります。それまで自分の身近かにいる老人であるとか、病人であるとか、亡くなられていく人達に対して率直にいつて何か嫌な気持ちが出て、彼らを厭い嫌っておられたのです。ところがその時から、そういう考えを深く反省させられて、自分の身近かに居る老人や、病人や、亡くなられていく人が、自分にとって今迄と違った存在として、お釈迦様は受けとられるようになったのであります。

私たちも、電車の中などで、失礼な言い方ですが体臭を感じるようなお年寄りがあると、やはり老いというものから逃げたいような気持ちになります。ところがお釈迦様は、その時より自分の周りにいる老人や、病人や、亡くなられていく人が、自分に対して、自分の未来のいままで見えなかった部分を明らかにしてくれる光明である、と受けとられたのです。

その光明によって、いつかは、自分もあのような老人になり、そして自分も病気に倒れて苦しみ、最後には死の恐怖におののいて、死して土くれになっていくというふうに観じられたのです。と同時に、それらの人々は、老いを苦しみあえぎながら、病の苦しみにおののきながら、死の恐怖に打ちのめされながら、そういう苦しみを通して自分の未来を教えてくれている存在である、と受けとられたのです。

そういう存在のことを佛教では、「如来」というのです。如来というのは佛教の学問では、お釈迦様のような立派な人を如来というのですが、私はそう受けとるから真の佛教を見失ってしまうと思うのです。本来の意味は、如来という如というのは、眞如ということで、私共の眞実のありようのことです。自分の眞実のありようというものが、自分に訪れてきて、それが理解されることを如来というのです。この場合は、見えなかった自分の未来をわざわざ自分の

所に訪れてきて知らせてくれた存在、それは自分の身近にいる老人や病人や死者なのであります。つまり、自分の周りに居る老人や病人が如来なのであります。そういう存在であると、お釈迦様が受けとられたのです。

さらに、自分の身近かにいる老人や、病人や、亡くなられていく人達というのは、自分にとって光明であると同時に、それらは、単なる電気とか、ガス灯のような光明でなくて、死の恐怖に苦しみおののきながら自分に眞実を教えてくれている存在である、というふうに受けとられたのです。つまり、自分のまわりにいる老病死者は、自分にとって大いなる思いやりを持った存在であったのであります。このように他者の老病死を受けとることは、お釈迦様を教主としている佛教者の基本的な考え方でなくてはならないと思います。

しかし反省してみますと、現在の日本の佛教者というのは、そういう視点が非常に欠落しているように思うのです。自分自身を含めて、自分の身近かにいる老人や病人や、亡くなられていく人達が如来であるという自覚が欠けています。それは、自分自身がお釈迦様を身近かに、自分のお教え主として、学びとっていないからです。イエス・キリストは、神に会いたかったら、貧しい人や、死におのいている人の所に行きなさいと聖書の中のべております。

ですから、キリスト者は、神に会うために、そのような所に行つて奉仕活動をしなが、神に会おうとするのです。ノーベル平和賞をもらったマザー・テレサがインドのカルカッタで死にゆく人々の救済をしているのは、そこで神に会うためなのであります。私は、お釈迦さまも自分に会いたかったら、老人や病人や死者の所に行きなさいとおっしゃられると思うのです。お釈迦様は、自分の身近かな老人や病人や死者を通して、自分の未来の一大事を自覚されたのであります。

まさに、まっ黒な髪を持って、人生のもっとも豊かな幸福な時にいたお釈迦様は、従来の考えを一八〇度も転換させられて、この自分の身近かにいる、老人や病人や死者が持っている苦しみと同じ苦

悩をいだくことになります。

佛教では、このもっとも深い苦しみのことを「カルーナ」Karuna といいます。カルーナは日本語に訳しますと、「呻き」という意味で、中国人は「悲」とこれを訳しました。私共は、悲しみを涙とか泣き声で一般には理解しますが、佛教では、涙が出たり、泣き声が出ている悲しみには驚かないのであります。涙も涸れて、声も出なくなつて呻くような苦しみになるとカルーナという状態、これは人間にとって大変に危険な状態であります。涙も声も出なくなつて、呻くような状態が長くつづくと、人間はこれに堪えられなくなつて、自殺したり、もしくは頭の働きの壊れてしまつたりします。

お釈迦様も、そのような状態になられたわけです。お釈迦さまは、このような苦しいカルーナの状態を解脱して、安心をえたいと願われたのであります。

このときお釈迦様に対して、一つの光明がもたらされることになります。それは、「沙門」の道が開かれていて、沙門になる、つまりお坊さまになることで解決しようと決意されるのであります。お釈迦さまは沙門の道を知ることによって、ご承知のとおり出家求道をなされたわけです。

お釈迦様は、二十九歳のとき、長男が生まれたことを契機として、出家してお坊さまになります。長男が生まれたとき、お釈迦様は庭を散歩しており、そのとき男子のお子さまが生まれたとの報告を受けて、小さな声で「ラーフラジャータ」とささやいたといわれております。そしてその言葉が長男の名前になってしまふのです。召使いが誤つてそうしたのかよく判りませんが、お釈迦様の息子は、ラーフラと呼ばれるようになります。ラーフラとは絆という意味です。絆といつて叫んだということは、出家求道を志していたお釈迦様にとって、長男の誕生は絆になるという気持ちがあったのかも知れません。そしてお釈迦様はすぐ出家されるのです。

二、智

カピラバットというお釈迦様の国から五百キロか六百キロくらい南東の方にある、マカダ国のラージヤカハという山の都で修行をされることになりました。そこまで夜中に王宮をひそかに出て行ってしまわれます。お釈迦様は長男ラーフラの子育てをしないわけで、ヨーロッパ学者の中には、お釈迦様はエゴイストだと言うようなことをおっしゃられる方がいますが、公平にみて出家のときのお釈迦様は、エゴイストであると思うのです。我々でしたら、まあ子供を育ててからにしようと思うのです。お釈迦様は、父親や母親が慟哭するのを見て、それから奥さんが止めてくれというのを見て、可愛い子供の成長するのを見ないで、王宮を出て出家し、一介の沙門になってしまわれるわけです。これはやはり、エゴイストと云われても仕方がないですね。

お釈迦様は、六年の修行の後、ブッタガヤで悟りをえて、暫く伝道なされ、インドでは有名な宗教者になられてから、故里のカピラバットウに帰って説法をなされるわけです。然し最後までお釈迦様の説法の座にこなかった人がいるのです。それは奥様のヤシヨードラーであります。

然し最後にお釈迦様は、一人の侍者をつけてヤシヨードラの部屋に行くのです。入口に入る前に、侍者に「これから何事が起ってもお前は手出しをしないで側でただ見ておいてだけよ」と言うのです。入りますと奥様は、向こうからぱっと駆けてきてお釈迦様に抱きついて泣き出すのです。侍者は聖者であるお釈迦様に女性が抱きついてはいけないと思ひまして、間に入ろうとするんですね。そうするとお釈迦様は一瞥するのですね。それでハットしてやめるんです。お釈迦様はヤシヨードラが泣くにまかせて長時間ひと言も語りませんでしたが、ヤシヨードラはお釈迦様が何のために出家求道されたのか、どのような悟りを得られたのか、自然に理解されたのであります。

この話はすばらしい話ですね。慈悲にうらぎられた沈黙が、もっともすぐれた言葉なることを示しております。釈尊に逢うまでのヤ

シヨードラは、「今、あの人は人々よりすぐれた宗教者と言われているけれど、私を捨てた人だ」と臍を曲げていたわけです。それは、お釈迦様がエゴイストだと思っていたのだと思います。しかしお釈迦様に再び逢って黙っていだかれていううちに、出家求道の原因となったお釈迦様の苦しみと、それをのり越えた悟りの世界を、体で感じることができたのだと思います。

生物がこの地球に誕生以来三十数億年も生きつづけることができたのは、死の危機をのり越える、とほうもないひたむきな努力があったからであります。そのような三十数億年も生きつづけてきた生物である人間も、死に対してはすべてをなげうっても、その問題にとり組むひたむきさがなければならぬのであります。お釈迦様はそのひたむきさの故に、妻子眷族をすてて出家求道されたのであります。ですから、自分の死という問題に関して、心ある動物である人間は、その危機が迫ってきたとき、全身全霊でそれを乗り越えていくのが自然であるように思うのです。

お釈迦様の立場が真に解つてくると、単にエゴイストであると批判出来ないと思うのです。エゴイストであったから勿論お釈迦様が解脱を得られ、そして私共が共通の生死の苦悩を乗り越えて、悟りと安心をえることができるのであります。生死の一大事にひたむきにとりくまれたお釈迦様は、出家して沙門の道を行じられたのであります。

沙門じんげもんは樹下石上じげせきじょうに坐して、三衣一鉢さんいいつぱつの最下端生活をして求道するのです。当時のインドでは、その日の食事でも定かでない貧しい人達でも、沙門が来ますと、自分の食事の一部を割いて供養するという文化があったのです。このような人々の求道への協賛によって、沙門の道がささえられていました。これは二千五百年も前に、人類がつくった素晴らしい文化の一つだと思います。現代の日本のように豊かになっても、貧しい人々が自由に学問が出来るということは、今だに不可能です。ところが当時のインドでは、樹下石上に坐して三衣一鉢の生活をするという沙門になれば、すべての人達が、その

最下端の生活を支えて求道ができたのであります。すべての人々が沙門になれば自由に道を学び学問をして修行することが出来たのです。

然しお釈迦様にとって樹下石上に坐して、最下端の生活をするということは、大変なことだったと思うのです。現在私たちは、お蔭様でインドの佛跡巡礼が出来るようになりました。巡礼中に私たちは一流のホテルやインド航空の機内食堂などでも、油断して食べると下痢をして苦悩することになります。それを一般の食堂や民衆の食事などをいただいては、死ぬような苦しみをする事になると思います。

お釈迦様は、私共よりもっと豊かな生活をしていたと思うのです。その人が一般の民衆の食事を分けていただくような食事をする、始めは下痢や苦痛で路上をのたうつような苦しい思いをなされたいと思います。ただ、お釈迦様にとってはそのような沙門道の苦しみより、生死の苦悩の方が大きかったから、このような苦行をしてでも生死苦より解脱したいと願い、実践されていたのであります。お釈迦様は、出家求道のはじめ、アーラーラ・カーラーマとウツダカ・ラーマプトウという二人の禪定者について、解脱道を求められました。しかし、この二人の禪定者についての修行を完成しても、お釈迦様は解脱道を発見することができませんでした。

その後お釈迦様がなされたのは、苦行です。沙門になること自身も苦行だと思ふのです。それが、その上に苦行をするのです。お釈迦様は、たとえば三年にわたり、「金の首飾り」といわれる断食の苦行をなさいました。なぜ首飾りというかといいますと、断食というのは、はじめ段々と食を減らしていき、そして一番きつい所に達したら、同じように比例してもとに戻して行くのです。ですから三年の断食ですと、一年半かけて断食し、一年半かけてもどして行くことになります。最初のときは、一日にゴマ二三粒、水、五六滴となります。

今、日本では、一週間くらいの断食でも、断食中は遠方にある家の食事の匂がわかるようになり、衝動的に食べ物を求めるようになります。しかし、そのようなときに食べてしまうと、死ぬような危

険が生まれます。

ですから、とてつもなく、自分をコントロールする強烈な意志がないと、金の首飾りという苦行は出来ないのです。

それからお釈迦様は、もったきびしい苦行をされています。「止息の行」といって、口に泥をつめて止息させる行であります。悶絶すると、仲間が水をかけたりして息を吹き返してくれるのです。息を吹き返すと、またそれをやるという壮絶な苦行です。今日の医学的な情報を知っている私共にとっては、息を吹き返すのが一寸遅くなると、大脳の神経細胞に酸素の供給が断たれてしまいますから、脳がこわれてしまう大変危険な行であることがわかります。

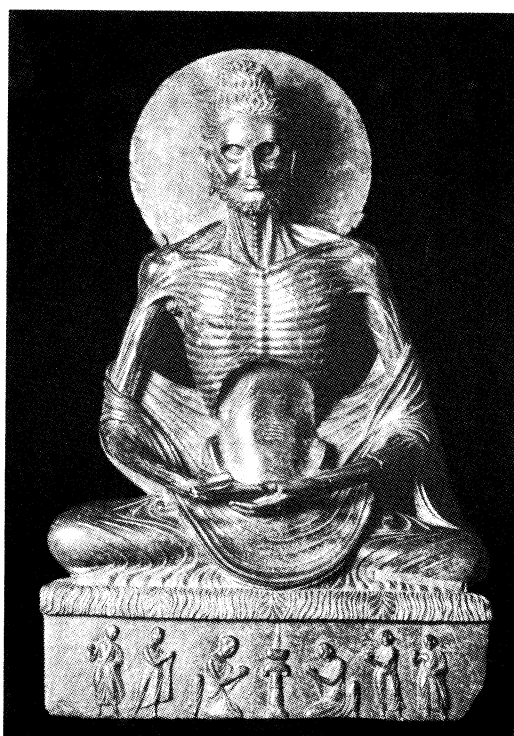
それから、密林の中で坐禅をなされています。インドの密林の中では蚊に刺されて大変だったろうと思うでしょうが、インドの密林の中では、とても蚊に刺さる場所ではないのです。私が一番最初インドの佛跡に行ったときに、バルランプールというところの土候の館に泊ったのです。その近くにあるお釈迦様の伝道されたコーサラ国のサーヴァツティーという都は、祇園精舎があります。

バルランプールの土候の館を朝、発ちましてお釈迦様の生まれたルンビニーに向って出発したのです。非常に快適な朝でした。十分くらい車に乗りまして植林しているサーラの林の中に入ったら、急に車が止まったのです。私は前の方に乗っていたので、前を見たら、トラが五・六頭前の道路をゆっくり、ゆっくり歩いているのです。私は一瞬日本人だものですから、サハリ・パークに行ったように錯覚したのです。インド人の通訳に聞いたところ「こら辺では毎年何人もの村人が奴らに喰べられるんです」と言うのです。周りにインド空軍のジェット基地があるような所でも、今でもそんな状態なのです。

今から二千五百年前といったら、密林の中に入って坐禅をするということは、トラやライオンになめられても、あんまりおいしくないから喰べられないですむような状態でない、つまり、命をけけないと、出来ない大変な苦行なんです。そんな苦行をなされたのです。

ところがお釈迦様はこれらの苦行の中からも、問題の解決が結果的に得られなかったのです。多くの釈尊伝には、お釈迦さまは人々を救済されるために、このような苦行をなされたと述べています。しかし、私は今にも述べたように、そのような苦行よりもっと苦しい生死苦があったから、それより解脱したために苦行をされたのであります。

そういうふうを描くことは、お釈迦様は、やっぱり好まれないと



釈迦苦行像、ラホール国立博物館蔵

思うのです。お釈迦様が、なぜそんなきびしい生活をしてまで沙門になったのか。それからお釈迦様は、「自分の前にも後にもこんなきびしい苦行をする人はいない。」と語っています。それは、それらの苦行よりも、お釈迦様がもたれたカルーナという生死の苦しみの方が深かったから、苦行をしてでも、生死苦をのり越えたいと思ったからであります。そのことを忘れてはならないと思います。

そして、同じようにお釈迦様と同じ心をもった人間である私共は、そういう苦しみを持っているのです。現在の私共は、その苦しみが

ら逃げてしまっていて生きているのです。お釈迦様は、逃げないで周りの老人や病人や亡くなられて行く人々から知らされた老・病・死という三つの恐怖を、まっ正面から命をかけて、解決を求めて歩まっていたのです。決して立派だったから、お釈迦様は偉大であったからそんなことをしたのではないのです。偉大だったら、そういうことをする必要はないのです。我々と同じ人間で、同じような悩みを持っていた人間であったから、お釈迦様は、沙門の道を歩まれたのであります。

苦行中のお釈迦様は、ある朝の坐禅中に一人の農夫の歌より、一つの悟りを得ることになります。たぶん、現在パキスタンのラホール国立博物館蔵の釈迦苦行像のようなお姿で、坐禅をなされていたときであると思います。

私は、何年前か、パキスタンの大統領の好意で日本に來たこの釈迦苦行像に東京の西武美術館で、逢うことができました。今でも鮮烈に、あの姿に逢ったときの震えるような感動を思い出します。本当に骨と、皮と、筋になっているのですが、目がとつもなく清潔で澄んでいたことが、強い印象として残っています。本当に凜凜とした目をしていました。

ちょうどお釈迦様がその苦行の極地にあったとき、一人の農夫の歌を聞くことによって、その苦行を中止することになります。

その農夫の歌は、

「琴を巧みに弾く名手は、弦を強く張って糸を切ってしまうような愚かなことをしないし、そうかといって、弦を緩く張って鈍い音を出すような愚かなこともしない。琴の名手は、ほどほどに弦を張って妙な音を奏でるものである。」

という意味のものでした。

この歌より、お釈迦様は、王宮の生活は緩く張った弦のように、自分の持っている能力を本当にだめにしてしまった人生であったと反省し、そして今の自分は弦を張りすぎて、もう一寸でも強くしたら弦が切れてしまうような状態であることを自覚します。弦が切れ

ることは死を意味します。それでは出家沙門としての求道がむだになってしまいます。それで苦行を捨てられて、求道としての坐禪を再び修することになります。この時の目が、ガンダーラの釈迦苦行像の目であるように思えてならないのです。あの釈迦苦行像の目は、そういうことにお気付きになった目であると思います。

それから釈迦様は、ネーランジャール河で沐浴し、ウルベール村のスジャーターという娘から乳麤にようの供養を受けて静養され、体の回復を待ってから、ネイランジャール河を渡った対岸のガヤの町はずれの菩提樹の木の下で、草を深々と敷いて、その上で坐禪を始めるのです。釈迦様は生死の苦悩からの解脱道を得られるまで、この坐禪をやめないと、金剛の決意をして坐禪を始めたのです。

そうして、坐禪をはじめて八日目の朝、明けの明星のまたたくのを見て、釈迦様は、生死の苦悩からの解脱道を得たのであります。時は、十二月八日の朝であったと北伝仏教は述べています。釈迦様は、悟りを得たときに、「吾、不死を得たり」と喜びの言葉を叫ばれています。

釈迦様は、それから不死なる道を、四十五年間インドの多くの人々に説かれていったわけです。ところが八十歳になったとき、クシナガラーの林の中で亡くなられたわけです。釈迦様が、「吾、不死を得たり」とおっしゃっているのに、八十年の後にクシナガラーでお亡くなりになるのは、理屈としてはおかしいのではないかと思うのですが、ところが釈迦様の教えを学ぶと、これは決して矛盾したものではありません。このことが理解できない人は、佛教者ではないのです。佛教者は、この答えが解っていないといけないのです。

では、不死なる世界とは何なのかについて考察していきたいと思っています。

それは決して矛盾したものではないということをお互い佛教者として納得しなくてはいけないと思うのです。釈迦様は、個人としての私たちは、今は健康であり、幸福であっても間もなく年をと

り、老化が加速度に進んでバランスを崩しますと、病気になります。そして病の痛みや苦しみを味って、最後には、死して土塊になっていくと語っています。死は自己の全存在の否定です。まだ佛教の解らない佛教者の中には、死してあの世があるようなことを言いますが、それは間違いです。

個としての我々は、死したら全存在を無くして、土塊になっていくのです。この町でも火葬場が出来ましたものですから、私共の檀信徒は、皆その火葬場にい、ろ、は、に、という四つある火葬場のどれか一つに入れられて火葬にされるわけです。隣りに収骨室がありますからそこで収骨して、自分の家のお墓に埋められるわけです。私は、収骨するときに必ず説教するのです。それは亡くられた方が佛様になったということを述べるのです。

生きているときには、あれ程、自分のことを主張し、自分自分と生きてきた人が、結局はこの白い骨だけしか残していないわけです。一銭も、何物も、何の名譽も持っていない。しかもこの白い骨も今では学問が明らかにしているように、驚くことに、亡くなられた方が三年間の大自然から頂いた食べ物の一部であるのであります。人間の体は、三年間で骨もふくめて全細胞すべてが変わるわけです。入れ替えがなされるわけです。まさに我々は生滅流転しているのです。一刹那、一刹那、体そのものは、神経細胞以外は全部の部品が新しい組織と変わるのです。ですから亡くなった方のそこに残っている白い骨は、その方の三年間の大自然から頂いた食べ物の中のカルシウムや鉄分などであります。

今の日本人は世界中から食べ物を受けておりますから、我々の体の方は先に国際化しているのです。英語なんか喋れなくても、体の方は国際化しちゃっているわけです。この白い骨だってその方の物ではないわけです。死は、完全に生れてくる前と同じように無化して、自分の全存在を否定しているのです。私共は生きているとき、あれ程自分を主張して生きてきた人が、完全にお釈迦様の教えどおり、自分の煩惱を死滅し、煩惱を支えた骨までも、大自然のものだ

ということを我々に示して亡くなっていったわけです。そう言う意味では完全なる涅槃なのです。お釈迦様の死だけが^{だいはん}大般涅槃というのは間違っているわけです。すべての生物の死は、大般涅槃なのです。

こんな莊嚴なことが、我々の最後の死によってなし遂げられるのです。あれだけ自己主張した人間が、死せば完全にそれを無化して、白い骨だって自分のものではないことを示しているのです。我々はそうだから、せめて大自然から借りた三年間の食物の中からお借りしたのも、我々の生命の続く限り子孫の生命の続くかぎり自分を無化して、生きる場をゆづってくれた方を供養するのであります。

佛教では、我々の心身を五蘊^{ごうん}説で説きます。色とは我々の身体です。受想行識とは、我々の心です。この私たちの心身である五蘊は、般若心経の中で五蘊皆空と言います。一般の人は、五蘊は、自分のものだと思っております。一寸つねると痛いし、ほめられるとうれしい、自分の身体と心を持っていると思うのです。

ところが、お釈迦様は、五蘊皆空と照見しなさいと言います。それは禅の公案で言えば、両親が生まれる前の自分を考えなさいということになります。我々の両親の生まれる前の自分というのは無いですね。無いものが、今つねると痛いというのはおかしいですね。そしてまもなく死して、土塊となって行く。死んだ後、骨だって自分のものでないわけです。完全に無化してゆくのです。

そういうふうに佛教は、自分というものを現在だけ見ると、自分の身体や心があると思いますけれど、佛教者というのは、自分の過去、つまり、父母未生以前の自己を見てしまった人なのです。未来つまり、死を見てしまった人なのです。自分は、それに直面していませんけど、死んでいった人を通して、その人の苦しみを通して、自分の未来を見るわけです。人間は死して、最後は、土塊になっていくという現実を知ってしまったのが佛教者なのです。それが佛教者の生死の苦しみであるし、それを解決するために、私共はお釈迦様の教えにすがっているわけですから。我々は必ず、自分を佛教

者として見つめるときには、自分の過去と現在と未来を見据えなければいけないです。

ですから悟りのメガネというのは、自分の過去と現在と未来というものをわけて見ることであります。佛教では三時といいますが、そのメガネなのです。そうすると自分の無いのがよく判るわけです。五蘊皆空を照見することになります。少なくとも、両親が生まれる前の自分は無いですね。死んだ後の自分も無い。前後が無いのに今有るといえるのはおかしいですね。

それは結局どうしてあるかというと、お釈迦様は大きな因縁によって生まれてきているということです。因縁の一つは両親から貰った生命です。今の言葉で言えば卵子と精子ですね。卵子と精子細胞の核のなかに、DNAという生命の設計図が入っているのです。その設計図が基本になって細胞分裂が行われるのです。初期の細胞分裂は、両親から頂いた卵子と精子の中にある栄養でなされるのですけど、間もなく母親の体内を通して、大自然からいただいた食物で細胞分裂が行われてくるのです。そして十カ月過ぎて五体が満足し、赤ちゃんとして生まれてくるのです。これは全部両親から頂いた生命と、生命の持っている設計図であるDNAというものをふまえて、そして大自然から頂いた食べ物によって我々の身体が造られてきたのです。佛教ではこれを因縁^{いんねん}生起と言います。また、因縁^{いんねん}所生ともいいます。現在では一般に、玄奘三蔵訳の因縁生起から、縁起という言葉がつかわれています。

心も大脳が形成されてくることによって、無意識と意識の働きを有するようになって来ます。心のもとになるDNAも、三十数億年生きてきた生命の因縁生起によるものであり、意識も因縁生起されたものであります。私たちの身体も心も、みな因縁生起したものですから、自分というものは全部無いわけであり、だから無自性であって、空で、それが真実です。

しかし、私たちのベースになる両親から頂いた生命^{いのち}というものは、親と連なっている。その両親も、それぞれの両親から生命を貰って

いる。お釈迦様は、三阿僧祇劫前さんあそうぎじょうから生命は連続して連なっているものであって、寿命無量と説示されています。お釈迦様が菩提樹下で「われ不死をえたり」とおっしゃった「不死」というのは、個としての我々の五蘊としての存在ではなくて、五蘊の中にある本當の意味の主人公である両親から我々にぶっ続けて流れている、生命のことです。この生命は地球上に誕生して、今日の自分まで三十数億年も生き続けている生命なのです。生命のことを、自分の本當の主人公だと悟って「われ不死をえたり」と言ったのです。ですから、このわれというのは、本當は、われではないのです。生命のことです。

この永遠に生きようとする生命を考えれば、日本人など一千年位さかのぼると皆親族になってしまいます。五千年くらいさかのぼれば、お釈迦様がモンゴロイドであるとなると、私共も親族になると思うのです。

私が第一回目のインドの佛跡巡礼をしたときに、ルンビニーでネパール人のばあさんが来て、「私はシヤカという姓である」と言うのです。そして「お前達は日本人だろう。お前達と俺は親類なんだから握手しよう」と言います。

山口昌男やまぐち しょうお（文化人類学者）がネパールには釈迦というお釈迦様の末裔がいるということを、ある本の中に書いていたのですが、目の前にその釈迦という人がいたわけです。よく見るとネパール人はモンゴロイドですから、日本のばあさんと同じ顔をしているのです。私は涙が出るほど嬉しかったです。佛伝資料によると殆どお釈迦様は、インドヨーロッパ系のようになっていますけれども、最近の研究では、モンゴロイドではないかという意見も出てきています。あのばあさんは、まさにネパール人ですから、五千年くらい遡れば、私とお釈迦様の生命は一体であるのではないかということになります。

ですからお釈迦様を想うときは、私は坐禅をしていますが、自分の中にも、お釈迦様と同じ生命が流れているという実感がするのです。ですから、お釈迦様の教えを自分の中にたたき込めば、私の体の中

にお釈迦様が生きておられる。私は信仰上の信念として、確信にみた気持ちになるのです。

だいたい二千万年さかのぼると、全人類が同じ親族だといって間違いないわけです。それよりも三十数億年もさかのぼって考えると全生物が生命同根なるものであることになります。しかし驚くことに、我々の本當の主人公は三十数億年も生き続けて地球上の全生命を造り出し、そしてまた未来に永遠に生き続けていくという生命そのものであるわけです。そういうものをお釈迦様は悟っている。それが我々の当体なんだということを悟って「我不死を得たり」とおっしゃったのです。

お釈迦様は、ある經典の中で、次のような話をしています。「自分達の先祖が母から頂いたお乳の量と大海の水の量とどちらが多いか。」弟子達は、「それは私共は常々お釈迦様の教えを聞いておりますから、大海の水よりも、私共先祖が母から頂いた乳の方が多いのです」と答えております。

私達の分別は、そんなことは無いと思うのですが、三十数億年という年月は、そのくらい長い時の流れなのです。地球上に生存するすべての水は、三十数億年の間に生物の体を通っていない水は存在しないのです。そんな途方もない歳月を生きてきた生命によって、私達は今生きているのです。このような生命をお釈迦様は、「われ不死を得たり」と言ってお悟りになったのです。道元禪師の示された坐禅は、その生命である私が、生命そのものとして坐ることです。

三十数億年前に誕生した最初の生物は、ひねれば潰れてしまう微細な脆い物だったと思うのですが、然し一刹那でも生命を相続したという切なる能力を持っていたために、それが段々進化して三十数億年も生き続けてきたのです。生物の中には、依然として単細胞の生物の方がいいと思って、初心をつらぬいて生きているものもありますし、人間のように、多細胞生物となり、大脳などを過度に発達させて、その方が安全だと思っているものもあります。

然し地球上に生存するすべての生物が、皆これが自分の一番いい

生命の相続の方法だと思って、自信と信念によって生き続けていると思うのです。決して人間だけがすぐれていると思えないのです。万物の霊長が人間だけだというのは、思い上がりもいいところだと思います。人間の造り出した核のために、間違って地球上の人類がふっ飛んでしまっても、最初の単細胞の状態で生きている生物は、生きながらえるように思うのです。そしてまた長い時間をかけて、我々のような人類を造り出すのではないかと思うのです。

そういう意味では、決して人間が優秀であって、そうでないものは優秀でないといえないと思うのです。とてつもなく、まか不思議な能力をお互いに持っていると思うのです。そういうものによって私共はここに生かされているのです。そういう世界をお釈迦様は悟ると同時に、人間には、そういう本当の主人公を忘れさせる分別というものがあることを悟ります。

分別は、自分自身が永遠に生き続けたいと願ってしまうのです。個々の生物は、自分の一つ一つの細胞の中に流れている生命というものが、永遠に生き続けるために生き続けているわけです。始めに、生命が生まれてから、二十億年の間は細胞分裂によって一つの細胞が二つに分かれるということによって、生命の伝承をしたのです。これは自然死がないのです。あるのは、マグマなんかに焼かれたりする事、死だけです。この生命伝承は、事故死はありますが自然死はないんです。最初の生物は、このような形で地球上に一杯広まっていたのです。

ところが、この自然死がない生命の伝承の方式というのは、欠点があるのです。限られた地球上のような空間の中では、果てしなく生物が増え続けることは、不可能なことです。現在人類が持っている人口問題と同じような問題にぶつかるのです。ところが二十億年過ぎると、大変不思議なことに、もう一つの違ったシステムが出来るのです。それは、この辺の川なんかにはボルボックスという原生生物がいるのですが、その生物がつくりだした生命伝承の方式です。

ボルボックスは、多細胞の親生物になると単細胞の子供生物を産

むのです。産むと親生物は老化して、病気を起し、とろけて死んでしまうのです。この方式の生命伝承を、私はボルボックス型の生命現象と呼んでいます。このボルボックス型の生命伝承は、これは限られた空間の中で果てしなく生命を相続するシステムであります。我々が地球上で肉眼で見ることのできる生物は、皆このボルボックス型の死という自己否定を通して、限られた空間の中で永遠に生き続けるという生命伝承の方式をもった生物であります。

私は、この生命伝承は、佛教的な生命伝承であると思います。お釈迦様もこのことを悟られたのではないかと思います。自己否定を通して、子供に自分の生命を伝えながら限られた空間の中で永遠に生きつづけるというのは、我執を捨てることによって、安心を得るという佛教の実現と同じであります。ガン細胞のようなあくなく自己主張をしてしまうと、地球上のような限られた空間の中では、多くの生物と一緒に生きるということができなくなります。生命の倫理というのが確立しないと、生物は生きて行けなくなります。ところが二十億年過ぎて、ボルボックス型の生物がもったような自己否定を通して生命を伝承するという方式は、限られた地球上で永遠に生命が伝承されるという大変すぐれたシステムであります。これが地球上の生物の主流になるわけです。

このようなことから、女子高生が投げかけた問いの答えは、「我々は永遠の生命を永遠に伝えるためにこの世に生まれてきたのである。」ということになります。自分の都合で生まれてきているわけではないのです。両親を選ばないというのも、そういうことを物語っていると思います。一生懸命成長するのも、人間の場合でしたら結婚して子供をもうけて、新しい生命の乗り物である子供に生命を伝承するためです。それをすると言もなく、両親は加速度に老化が始まり、そして、死して土くれとなります。

このような人間の生涯を日本の場合には、「譲り葉」という植物で

比喩的に説示しています。譲り葉はお正月の注連縄しめなわに使用する飾りものです。なぜ譲り葉を飾るかと言いますと、日本の家庭の一つの理想を、この植物にみるのです。譲り葉は一本の譲り葉の木におじいさんの葉っぱと、おやじの葉っぱと、こどもの葉っぱがあるのです。そして、孫の葉っぱが生まれると、おじいさん葉っぱが落ちるのです。つまり三世代がいつもある。いつも三世代、三世代なんです。我々の先祖は譲り葉のような世界に、生命伝承して行く家の理想を感じて、正月の注連縄に使用したのだと思います。



仏立像、ラホール国立博物館蔵

然し、三代続いても必ず自己否定を通して、おじいさんは孫の生きる場所を作るのです。そういう意味で、私共にとっては、人間の老いとか病いとか、死というのは、残された我々に対する死者の思いやりなんです。その人がボルボックス型の生物として持っている思いやりなんです。佛教者は、このような自分の身近かにいる病人や、老人や、死者の思いやりなんだ、「慈」なんだという世界を忘れてはならないと思います。あの人達だって何万年も生きていたいわけです。ところが途方もない慈を持って、自分を完全に無化して、

私達に生きる空間を与えるために、老いの苦しみをし、病気の苦しみをし、死の恐怖におののきながら、死して土塊となっていくのですね。ですから老人や病人や死者のその苦しみは、我々に対する思いやりなんです。我々に対する思いやりなんだということが少し判ってくれば、もう少し日本の家庭、老人の問題、死の告知の問題などは解決して行くと思います。

人間はこのような生命の実相を、なかなか気づくことができないでいます。お釈迦様は、それは我々の心の中にそういう真実を見ぬく眼が無いからで、それは心の中に濁りがあるからであると説示されています。その濁りによって、自分というものだけしか見えなくなってしまうのです。そして自分の利益しか考えない我執となる。それが結局我々の生死の苦しみの原因をつくっているのです。お釈迦様は、その我執を捨てることによって、安心が得られると説示しています。しかし我執を全部捨てるといっているではありません。お釈迦様は、原始経典の中で、こういうことをいっております。「私共の人生というのは、真暗闇の中を乾燥した草原で一本の松明を持って旅をしているようなものである。松明は、絶対必要だ。然し松明をのほろびにすると、一寸乾草一本に燃えうつり、それが隣りの乾草にも燃え移って、またたく間に火の海となってしまう。自分も、自分の周りにいる多くの仲間も死滅することになってしまう。」

この一本の松明たいまつは生きるために必要な我執のことです。しかし、油断すると自分を破滅することにもなる危険をとまなうもので、気をつけて大切に旅をしなければいけないのです。お釈迦様は煩惱を全部死滅したと言う方もいますが、そんなことはないです。お釈迦様だって生きているうちは、一本の松明である煩惱を持って生活していたと思います。

お釈迦様は、そういう意味では、松明のコントロールをうまくすることによって、安心を得よと説示されているのです。我々は、死によって松明を必要としなくなるまでは、この旅を止めることはで

きないのです。しかし、死ねばすべての人が、完全に煩惱がなくなるわけですから、死は我々にとっては完全なる涅槃となるのであります。

三、慈

然し人間は、自分の死によって、自分の体の中に流れている生命を子供に託し、子供や孫のいない人達だって同胞がいるわけですから、生命は永遠に生き続けていくわけですから、安心、という気持ちを持たなくてはいけないわけです。お釈迦様は、自分の中にある永遠なる不死なるものを信じて、我々のすべての先祖がそうであったように、何万年も生きたかったわけですね、それを自ら老いて、自ら病にたおれ、自ら死して、老いと、病いと、死はみんな我々に対する思いやりなんだという世界に気付くことによって、人として安心を確立しなさいと説示されています。生まれる前は何もないわけです。あるのは生命だけです。その両親よりさずかった生命をベースにして、無から自分の身心というものを作っていたわけですから、生命は子孫に伝承され、永遠に生きようとしています。

私共の家庭では、子供や、孫と一緒に生活していきながら、生命の永遠性というものをみきわめ、安心を確立していく必要があると思います。私は譲り葉の話というのは大乗佛教的であって、死と不死を知って安心を確立して行くよい手がかりになると思います。

私たちは、一年生の落葉樹だけみていったら、なかなか我々は安心を得られないと思います。然し譲り葉の話は、否定を通して生命が相続しているということを、判りやすく示していると思います。

お釈迦様は、生命についてこのような話をしているのです。「私共は楡（にれ）の林のような存在であると悟らなくてはいけない」というのです。我々は、楡の木を見てみると、一本一本芽を出して成長し、大きな大木になって枯れて病氣をおこし老化して、無くなってしまうと思うのですが、楡の木は、地下では根が全部連なっているのです。ですから林全体が一つの生命体なのです。

我々も、一本、一本の木と同じで、個々の人間を見ていると、成長し、老化し、最後は土塊となって無くなってしまふと思いますが、林として、一つの生命体として、三十数億年も生き続けて、しかも未来へむけて永遠に生き続けようとしているのです。これは真実であると知った上で、信じていかななくてはならないのです。ですから、そういう中で、一つの楡の林が永遠に生き続けていくためには、老いと病いと死というものが無いと成就しない。そういう意味で、老いと病いと死というものは、残された我々に対する思いやりなんです。そういう世界が解つてくると、老いというものは、大乗崇高な営みであることが理解されます。病いというものも、苦しみながら病むわけですから、崇高なものだと思ふのです。我々は、他人の老いと病いと死を持たなかったら、文明というものも、今の豊かな生活も、持ちえなかったのであります。

我々が豊かな生活が出来るのも、心を持った動物にとって、老いの壮絶と病の壮絶と死の恐怖があつたから文明が進歩したわけで、豊かな生活が出来るわけです。そういうことが解つただけでも、お釈迦様が、「老いと病と死は、我々に対する思いやりである」とおっしゃるのをよく解ると思ふのです。お釈迦様は、そういう世界を悟られて、一人でも多くの人に、そういう世界を知ってもらいたいと思われて、成道後四十五年間も樹下石上に生活しながら、はだしでインドの大地を歩いて、国王も一般の人にも差別することなく、説き明かしてくれたのであります。

特に、最後の伝道の旅は『大般涅槃經』という經典に述べられています。大変な旅でありました。この經典は岩波文庫で『ブッタ最後の旅』という題で中村元先生が訳されて、出ていますので、是非お読み下さい。

お釈迦様は、この最後の伝道の旅で、ベーサリという所で病氣になられ、八十歳のお身体はもうぼろぼろになってしまふ。しかし、そのような状態で旅をしてベーパーへ着いたとき、鍛冶屋のチュンダの供養を受けることになるのです。その前の、ベーパーのとき

に病気になっているので、足をひきずるようにしては、「アーナンダーよ衣を三つに折って床を敷いてくれ」といって道端にお休みになりながら旅をしています。

鍛冶屋のチュンダの家へ行って、きのこ料理の供養を受けるわけです。そしてお釈迦様は、チュンダに「私だけしか供養するな、他の人に食べさせてはいけない」とおっしゃるのです。チュンダはお釈迦様がそうおっしゃるので、「はい、かしこまりました」と答えました。更にお釈迦様は、「私が食べ残した物は土深く埋めなさい」と言って供養にあずかります。そしてお釈迦様にとって最後のこの食事になるわけです。それから間もなくして、お釈迦様は激痛に襲われ、血を吐いて苦しみ、のたうつのです。その苦しみを医者にもかからず、薬も飲まないで、正念によってお釈迦様はじっと耐えられたのであります。そして、その中で、次の町であるクシナガラに行きたいと言うのです。クシナガラまで十九^キです。私はまだそこを歩いていないのですが、死ぬまでにいつか一度そこを歩きたいと思っています。お釈迦様がどんな思いをなされて、そこを旅なされたかを思い、そこを歩きたいと思っています。

私は長いこと、何故チュンダの家で、食べると病気になるようなきのこ料理を、他の人に食べてはいけないと言って、お釈迦様だけがなぜ食べられたのか疑問でありました。

お釈迦様は、最後にチュンダが供養したきのこを食べて病気になって死んだということになると、チュンダの評判が悪くなるということとを心配され、「自分にとって、一番有難い食事は、自分が悟りを得る前に供養していただいた、ウルベーラ村のスジャターの乳の供養と、そして自分の最後の食事であるターバンのチュンダの供養だ」と語られています。さらに「これは尊ばれるべき供養である、決してチュンダのことを非難してはいけない」ともおっしゃるわけです。最近、私はお釈迦様は私たちのことを思ってチュンダの食事を食べられたのである、と考えるようになりました。それも、現代の私たち、日本人のために食べられたように思えてならないのであります。

現在の日本人は、癌などの末期患者に対して病名の告知できないことを、医療現場では困っています。告知すると、患者は気がおかしくなってしまうて、正当な医療処置が出来なくなってしまうのです。こんな佛教者にとって恥ずかしいことはありません。仏教は生死の苦悩の解脱道であって、本当の仏教者であるならば死の告知をしても生きられるはずであります。佛教徒であって、死の告知が出来ないということは、真の佛教徒でないということを物語っているわけであります。

このようなわずらわしいことが起きるのも、私たちが死んでしまつてから出て行つてお葬式や法事だけして、それで佛教だと思つていくからであります。このような反省をすると、どうも私は、お釈迦様が、最後にチュンダの食事をされたのは、あきらかに、病気になるて七転八倒の苦しみを味わうことをご承知のうえで、食事をなされておられ、それは、私たちの為だったのであると思うのです。お釈迦様は、年をとられた上、その上大病してふらふらになった状態の中で食事をなされたというのは、人間にとって最も劣悪の状態の中に於いても、それを乗り越えて生きる力があるんだということを、お釈迦様は、自らそこでお示し下されたと思うのです。我々のお釈迦様は、老いてぼろぼろになり、病にたおれてぼろぼろになっており、それを食すれば大変な苦しみに落ちいることを知ったうえで、その苦悩に耐えられて生きる勇気を私たちに立証されたのであります。老いと病いの最下端の状態にありながら、その上毒きのこを食しての苦痛に、正念によって、耐えることによって、お前達にも有るんだということを立証してくれたのであります。

こんな途方もないお釈迦様を、私達は教主として仰いで、自らの安心と生きがいを得られるわけで、大変な幸せであると思っております。どうかこのようなことも、皆さんの参学のテーマとしていただければ、幸いに存じます。

(このご法話は、去る六月九日、龍泉院参禅会が常真寺へ一泊参禅を行った際のものです。)